

林芙美子の戦後作品における〈雨〉の働き

——『浮雲』を中心に——

王 威 鈞*

1. はじめに

林芙美子（明治36年—昭和26年）は「放浪」の作家として位置付けられた詩人かつ小説家である。芙美子は戦争に深くかわりを持っており、ペン部隊として中国戦場へ派遣されたこともある。そのためであろうか、彼女の戦後作品では、戦争で生き残った人を主人公にするものが多い。その上、彼女の戦後作品において〈雨〉という要素を戦争と同時に物語に取り入れることが数多く見られ、彼女の最晩年の傑作『浮雲』は、その適例である。

『浮雲』は昭和24年の秋から足かけ三年月刊雑誌に書きつがれ、戦後の虚無的な人間像を写し出した名作として注目されている。『浮雲』の主人公、幸田ゆき子は義弟の伊庭杉夫との不倫関係からのがれるため、戦時下、海外の植民地仏印（現在ベトナム）へ渡り、高原都市ダラットの山林事務所までタイピストをしていた。そこで林業調査に携っていた既婚者の農林技師・富岡兼吾と愛し合うようになった。敗戦後、別々に焦土と化した東京へ引き揚げて来た二人は、東京でよりを戻すが、それぞれ他の異性とも関係を持つ。ゆき子は富岡がだめ男だとわかりつつも離れようとせず、別れられない。東京から、伊香保温泉、伊豆長岡、屋久島まで富岡とともに移ったが、屋久島でゆき子が咯血して孤独に息を引きとった、という結末で終わる。

『浮雲』においても〈雨〉がしばしば背景とし

て言及されている。文中に数多く出現する上、冒頭にゆき子が日本へ引き揚げた日も、物語の結末にゆき子が屋久島で最期を迎えた日も、雨の日である。つまり、〈雨〉が全篇を通して用いられる符号であり、物語において重要な要素だと思われる。野田敦子が、〈雨〉について昨今ではほとんど議論されなくなったが、芙美子文学の特色として看過できないと指摘している¹。では、〈雨〉は『浮雲』において何を表すのか。

『浮雲』における〈雨〉に関しては、今村潤子は雨の描写を「降っている雨の描写」と「降っていない雨の描写」と分類した上、前項を更に「単なる雨の描写」と「主観的な雨の描写」と細分した²。今村氏は「主観的な雨の描写」を取り上げて分析した結果、「孤独な女心の表現」「男女間の心理の表現」「現実と仏印の思い出をつなぐよすがとしての表現」「ニヒリズムと死の関係」という四つに分けた。しかし、論文で例として取り上げられた雨に関する描写は、一つの分類に当てはまるとは言い難い³。それに、「単なる雨の描写」と「主観的な雨の描写」の分け方が、「その日の天候状態を晴とか雨とかいう時の雨、もう一つを雨に登場人物の感情が投影されていたり、雨によってその場の雰囲気や語らせているもの」としたが、人々の考え方や基準が異なれば違う結果になるのではないか。そのため、本稿では「降っている雨の描写」を中心に考察し、前後のテキストを参考しながら更なる分類を行わないことにする。

一方、牧野陽子は雨の場面に関する描写に注目し、聴覚および視覚の立場から考察したところ、

*台湾大学・院生

「必ず、窓越しに音のみで捉えられ、窓という枠組みで切り取られている」、そして「大地を潤すものでありながら、それに応える樹々や緑の自然描写が、最後の屋久島の場面以外は、現実の描写としては物語の中にほとんどない⁴と、〈雨〉の場面に共通する二つの特徴を指摘している。牧野氏はさらに「窓を介した雨音の描写は、そこに存在すべき雨に濡れる緑の情景が欠けていることによって、自然のみずみずしさや命の根源に関わる何か大切なものを喪失した状態をあらわす⁵と説明した。しかし、『浮雲』で雨への言及は必ずしも窓が介したものではない。むしろ、多くの場合で〈雨〉が背景として使われ、雨音の描写が逆に少ないのである。

背景としての〈雨〉は主人公たちが東京、または屋久島にいるときに集中している一方、ダラットという舞台では滅多にない。主人公たちはダラットで楽しく恋に落ちたのに対し、敗れた日本へ引き揚げてから、二人とも容易には立ち直れなかった。そこで、『浮雲』において〈雨〉は主人公たちの複雑な心境を反映する働きを持っていると思われる。その上、心境の変化とともに二人の関係も変わるので、〈雨〉が主人公たちの関係を反映できるのであろう。そのため、本稿では〈雨〉の場面と主人公たち、ゆき子と富岡の心境とのかかわりを中心に考察し、〈雨〉の働きを明らかにしたい。

2. 雨——厳しい現実

『浮雲』の冒頭は、雨の中で、日本へ引き揚げたばかりのゆき子が敦賀港近くの宿で風呂に入る場面から始まる。収容所を出た日に、ゆき子は敦賀の町で宿を見つけ、ようやく故郷の畳に寝転ぶことができた。長い船旅を続けてきたゆき子は宿の濁った湯のお風呂に浸かっても、「人肌の浸みに、白濁した湯かげんも、気持ちがよかった」と思っていた。そして風呂の中、薄暗い煤けた窓に

あたる、「しゃぶしゃぶしたみぞれまじりの雨」が、「ゆき子の孤独な心のなかに、無量な気持ちを誘った」ので、ゆき子は汚れたガラスを開け、「鉛色の雨空を見上げていると、久しぶりに見る、故国の貧しい空なのだ」と、呼吸を殺して、その窓の景色にみとれている。

今村氏は「外地から引揚げてきた女の孤独と、変りはてた本国でのこれから始まる生活に対する不安から侘しさ⁶が「しゃぶしゃぶしたみぞれまじりの雨」により、一層読者の興味をそそるのだと指摘した。また、川本三郎はこの冒頭について、「日本に戻ってきて最初に感じたのが「冷い風」だったことは、ゆき子のこれからの厳しい生を暗示している。『浮雲』の悲劇は、冒頭からすでに明らかである⁷と述べた。ゆき子にとって温かく、お伽話のようなダラットと、敗れた日本とのギャップがあまりにも大きすぎて、そこから喪失感と無力感が引き出されたにほかならない。戦争時に雄々しく奮い立ったのに対し、敗戦国の運命にたどりついたゆき子は厳しい人生を歩まざるを得ず、「冷い風」に当たるのである。

そのような環境で、ゆき子はふと戦時下のダラットを思い出し、見惚れる景色や富岡との記憶をいろいろ蘇らせたが、「雨は土砂降りになった様子だ。樋をつたう雨声が滝のように激しくなり、ゆき子はふっとまた現実に呼び戻される。すなわち、昔の思い出に耽っていたゆき子は激しい雨声に刺激され、否応なしに甘美な記憶の中から現実に呼び戻される。過去のダラットでの楽しい思い出と、日本での厳しい現実が、〈雨〉の出現を通してくっきり隔たる。〈雨〉という記号は、ゆき子が敗戦した日本での厳しい現実を暗示しているのであろう。

では、富岡の方はどうだろうか。富岡は無事に日本へ引き揚げたが、

何もかも、国とともに喪失してしまっていると云う感情は、背筋が冷い、この冬の雨のように侘びしさだった。孤独な国の、一

人々は、釘づけになっているようなものだと考える。(二十二)

富岡は孤独感と絶望感に襲われて耐えきれないため、ゆき子を連れて伊香保で自殺することを密かに計画した。東京で立ち直れない富岡は家族や経済問題を放っておき、この現実から逃げようとして伊香保で自ら命を絶つことを決意したのである。そして伊香保に着き、富岡はここで二人がまもなく死んでしまうと思った瞬間、不意に「今朝の東京の、御所の雨が心を掠め」た。なお、「御所の雨」は以下のように記された。

富岡は、雨の街に立って、並樹の美しい、昔の東宮御所の方を眺めていた。(後略)じいっと見ているうちに、また、空虚な、とらえどころのない絶望がおそって来た。(二十二)

富岡は雨の中で、東京の東宮御所を見つめると、空虚で絶望的な気分になってしまった。東宮御所とは次期天皇・皇太子の邸宅であり、もともと日本人の精神的支柱だった皇室を見ても、富岡が絶望感に襲われたのである。つまり、敗戦により皇室が当時の人々を支える力が失われたか、富岡が不安な状態に陥り、厳しい現実を受け止めざるを得ない。それに対し、「伊香保は雨が晴れて」おり、東京の象徴する厳しい現実から一時逃れることを示唆している。伊香保の宿で、ゆき子は硝子戸を開け、「眼の前の山も空も乳色に煙っている。仏印の山々の、雨に煙っている景色に似ている」と思っていた。このように、ゆき子は伊香保を仏印のように捉え、東京と相対化する。そして伊香保で一息すると、富岡は久しぶりに「軽々と心が解放された気持ち」で「安南語で唄をくちずさん」だ。ゆき子も安南の流行った歌を歌いながら、「しみじみとダラットの生活をなつかしがって」おり、「ダラットみたいね」と再び伊香保を仏印の思い出と結んだ。二人は伊香保の「晴れた」環境で甘美な思い出に浸り、不如意な人生および苦しみから逃れるのであろう。

二人は伊香保で意味もなく二日ばかり暮らし、

「二日も雨が続き」た。もともと富岡はゆき子と無理心中するつもりで伊香保に行ったが、二日の間に少しも心中に向かわなかった。ところが、家族を支える余裕がないことや、気後れになった自分に気づくと、富岡はとうとう「天地の狭さのなかに疲れ切って」しまい、ゆき子に旅の目的を打ち明けた。伊香保に着いた最初の日には雨が晴れて、二人が一時苛酷な現実から逃げることができ、辛い現実から抜け出せた。しかし、二日連続の雨に降られた富岡が、ついに東京の家族やら戦争による気後れで孤独な自分やらに直面せざるを得なかった。ゆき子と同じく、〈雨〉が富岡にとっても厳しい現実を想起させる符号だと考えられる。

3. 雨——ゆき子と富岡の関係の悪化

戦後の東京に戻ってきたゆき子は住める場所がなかった。富岡にお金を工面してもらえず、伊庭の家にも戻りたくないため、ついに荒物屋の古い物置を借りて住むことになった。しかし、「小さい幸福らしいものは感じるのだったが、心もとなない幸福らしさで、明日の事は少しも判らない」と、居場所を得たとしても、ゆき子はなお不安な気持ちのままだった。そして物置の小舎に落ち着いたその「翌朝は雨であった」。

ひとまず身を寄せる小舎を得たとしても、富岡からの連絡がなかなか来なかったので、ゆき子は精神的にうつろになった。そこで、ゆき子は目的のない気持ちで、新宿へ出てみた。淋しい街を歩きながら、せっかく小舎を得られたので、あの小舎から自分の人生が始まってゆくのもいいとゆき子はそう思っていた。その道端で、突然に背の高い外国人に呼び止められたが、ゆき子は抵抗するどころか、大胆になって外国人と並んで歩き出した。外国人は早口で喋りかけて来たが、ゆき子は黙って、外国人に軀を寄せて歩ききりだった。お互いの衝動が、このゆきずりの二人の心のなかに一種の生氣をもたらしてきた。ゆき子は外国人と

話せば、「ダラットで安南人と話した、仏蘭西語や英語のミックスされた言葉を使っていた生活を、いま急に呼びさまされたような気」がし、少しずつ片言で外国人と言葉を交わした。「二人は何時の間にか腕を組んで歩いていた。おかしくもないのに、ゆき子は声をたてて酔ったように笑ってばかり」いて、その瞬間、富岡のことを忘れたようである。「晴れがましい気持ちで、小さくなって、自分の道づれに寄り添っていた」ゆき子は、「サイゴンの街を想い出して、その昔に戻ったような気」がして、富岡との煩わしい情事を頭から離させた。

ゆき子と富岡との間に、外国人であるジョオの出現によって亀裂が出てくる。ゆき子は敗戦後、富岡との縁を続けるため、実家に帰らずに富岡の家まで訪れた。富岡に断られたとしても、なお彼に縋り付きつづけた。しかし、ゆき子は身を落着ける小舎を持った上、身を寄せる人に出会い、新たな人生を踏み出すような気分となったのである。この描写から、昔の情熱と思い出から解放し、自分の人生を取り戻そうとするゆき子の姿勢が読み取れる。新たな男性と結ばれるのは、富岡との不健全な関係を切り離す有効な手段だろう。

小舎へ引越して十日あまり経ったある夕方、富岡が訪れてきたが、ついにゆき子と喧嘩して別れた。ゆき子は夜明けに夢を見ていたが、「ぱちりと眼を開いて、夜の明けた天窓の雨もよいの空を、じいっとみつめた。ふわふわとした大きい枕だけが、ひどくゆき子を慰めてくれ」た。大きい枕を持ってきたのはジョオなのだった。つまり、ジョオという男性と付き合ってから、ゆき子ははじめて富岡への執着を手放したのである。そこで、背景としての〈雨〉は「ゆき子と富岡との関係の亀裂」と結びついて働くと考えられる。

一方、ゆき子のそばにジョオの存在を発見した富岡は、ゆき子と別れるかどうか悩んだところ、ゆき子とちゃんと話し合いたがっているのだから、四谷見附の駅で顔合わせる約束となった。その日も、

あいにく雨だった。乗客が富岡の目の前で忙しく通っていったが、「富岡は何と云ふ事もなく、絶望的な気持ちになってい」た。「これ以上はどうしようもないといった、つきつめた思いが、通り魔のように」彼の胸の中にこもっていた。そして、富岡は坂になった道を見上げると、

鉛色の光った坂道を、濡れ鼠になった雑種の犬が、よろめきながら、誰かを探し求めるように歩きまわっている。(二十二)

ここで富岡と濡れた犬のイメージが重なり合ってしまうのだろう。富岡の目に映った「誰か」を探し求める犬が、ゆき子の来るのを待ちくたびれた自分のようにみじめに見えたのである。そのような不安な状態に置かれ三十分も待ちわびた富岡はようやくゆき子と会ったが、「別れ時が来ている」と思っていた。

二人が歩き出すと、富岡は「何もかも、国とともに喪失してしまっていると云う感情は、背筋が冷い、この冬の雨のような侘びしさ」だと認識し、つい「自分の孤独の道づれになって貰いたい」気持ちになって、ゆき子と無理心中することさえも考えた。その時の富岡はゆき子との関係に対して悲観的だけでなく、敗戦によってもたらされた喪失感や無力感に覆われ、現実からなかなか立ち直れず、昔の光景を恋しく思い耽った。そして、雨の中にいく場所がない、可哀相な「濡れ鼠になった雑種の犬」に共感を覚えて、自分を犬と重なり合わせたと考えられる。

雨の日に会った二人は、関係の修復に進むどころか、富岡の方が密かにゆき子を殺す場面を構想し、命を絶とうとして伊香保温泉へ最期を迎えに行くことを計画した。このように、背景としての〈雨〉は二人の関係に亀裂が生じることにつながって機能すると思われる。

また、富岡は伊香保で偶然におせいという女性に出会い、密かに東京で同棲するに至った。おせいの亭主はおせいに復縁を願ったが、彼女に断れると、あまりの怒りで彼女を殺してしまった。お

せいの急死を知ったゆき子は再び富岡に連絡したが、富岡が来てくれなかったため、いらいらして思い切って富岡を訪ねて行った。その日も雨だった。ゆき子は富岡との復縁を待ち望んだ一方、富岡はゆき子の訪問を「迷惑至極」だと思い、冷たくゆき子に接した。風雨が激しい中、二人は仏印の思い出を語り合い、「その思い出話によって、もう一度、激しいあの日の愛情を呼び戻そうと努力しあって」いるが、富岡が寝言にまでおせいを呼んでいる。そのため、ゆき子は富岡から離れることにした。激しい風雨の中で話し合っても努力しても、二人がよりを戻せない。このように背景としての〈雨〉はゆき子と富岡との関係の亀裂および終わりの場面で使われるため、『浮雲』における〈雨〉が二人の関係の悪化を示唆すると考えられる。

4. 雨——死と生のしきり

富岡はゆき子との情死行で伊香保に行ったが、この世に恋々と未練を持ち、偶然に行きあったおせいと密かに関係を持ち続け、おせいが家出し東京で富岡と一緒に住むに至った。しかし、おせいの亭主は東京までおせいを探しに来たところ、おせいに復縁の願いを断られると、あまりの怒りでおせいを殺してしまった。独りとなった富岡は、おせいのいないベットに横になり、「呆んやり、雨の音を聴いていた」。そして、富岡が雨の窓を見ている場面が以下のように描写されている。富岡にとって〈雨〉は死のイメージと深く関連していることがうかがえる。

雨の窓を見ていると、外の緑が濡れて霧を噴いているように見えた。一種の神秘的な緑の光線が、ぐっと部屋の中にまで浸み込んで来る。死というものが、たやすく肌に触れる気がした。(四十二)

この事件の渦中に巻き込まれた富岡は、おせいの頓死を悲しむのではなく、かえってさばさばし

た気持ちであり、おせいの死を自分の生活転換の機会として捉えた。「まず、この部屋から去る事。それと同時に、妻も両親も捨てる事。もし、よかったら、自分の名前さえも替えてみたかった。勤め口もやめて新しい仕事をみつけたかった」という描写のように、「激しく降る雨」の中で富岡は昔の自分を葬りたい意欲が湧いた。肉体的な死亡ではないにも関わらず、職業から家族関係や名前まで切り捨て、過去の諸々を経験した自分の息を殺すのも一種の死亡だと言えよう。そして、彼は新たな人生を踏み出そうとして、死亡を通して再生を図るのである。では、富岡にとって再生は何だろうか。「政治、社会道徳、それらのものを、粉ひき機械のように、粉々に打ち砕いて、奔放な自分にかえりたかった。独りという事がどんなに爽やかなものかと、窓外の枝木をふるわせて激しく降る雨に、富岡は、うっとり目を向けてみる」という描写から、富岡にとっての再生は独りになって奔放な自分にかえることだとわかる。そこで、この激しい〈雨〉は富岡を死、さらに再生に導くのではないかと考えられる。

また、屋久島に着いた富岡は、病んだゆき子の世話をしながら焼酎を飲んだ。お酒に酔ってきた富岡は、大雨の中で次のように考えていた。

雨は、嵐に近い降りようになった。樋をつたう荒い水音が、打楽器のように聴える。ここには何の思想も不要だった。ただ生きるだけの為にここにある気がして、(中略)どの地を神は支配している。雨が降ろうとも、風が吹こうとも、神の意のままである。苛酷なこの雨のなかに、この島の人達は素朴に生きて闘っているのだ。雨に敗れては生きてはいられないのだ。(六十一)

「雨に敗れては生きてはいられない」という考え方から、富岡が〈雨〉を死と生と結びつけることが明らかだ。神の支配している、すべての土地に風も雨も神の意で逆らえなく、人間ができることは、生きるために闘うだけだ。もしも雨に敗れ

ると死を迎えざるを得ない。雨に勝てば、生きていられるのである。つまり、〈雨〉は死と生のしきりを示すと考えられる。

では、ゆき子の方はどうだろうか。『浮雲』の最後、富岡が屋久島という南の果ての島へ行くと決意した際、ゆき子はどうしても富岡と離れられないと同行を迫った。体の具合を考慮せず、「月のうち、三十五日は雨という位」の屋久島へ渡ってしまった。屋久島は終日雨の天気であり、住み心地がよくない。それだけでなく、治療施設も乏しいため、ゆき子は専門的な治療を受けられないのである。日を追って重篤化し、「ノアの洪水のように、家そのものが、ぞっぷりと、水浸しにあっていよう」な環境で、ゆき子は孤独にこの世を去った。

ノアや、ロトの審判が、雨の音のなかに、轟々と、押し寄せて来るようで、ゆき子は、その響きの洞穴の向うに、誰にも愛されなかった一人の女のむなしさが、こだまになって戻って来る、淋しい姿を見る。(中略) ゆき子はぬるぬるした血をううっと咽喉のなかへ押し戻しながら、生埋めにされる人間のよう、ああ生きたいとうめいていた。(六十五)

ゆき子は死にたくないが、苦しくあえぎながら大雨の中で亡くなった。「じれじれした雨」の中で、ゆき子は「自分の寝棺は、どの位の大きさなのだろうかと、不吉な空想」をした。そこで、〈雨〉はゆき子にとっても死とつながっていると思われる。富岡の考え方によれば、ゆき子こそ「雨に敗れては生きてはいられない」例なのではないか。このように『浮雲』において、〈雨〉は死と生のしきりを示して機能すると考えた。

5. 終わりに

〈雨〉という要素は常に林芙美子の作品に取り入れられ、とりわけ『浮雲』にいくつかの働きと

して用いられている。本稿では『浮雲』における〈雨〉の働きを中心に考察し、〈雨〉が「厳しい現実」「ゆき子と富岡の関係の悪化」「死と生のしきり」を示唆すると考えられる。

『浮雲』に雨の描写が多いのに対し、雨は滅多に仏印とかかわって記されていない⁸。ところが、「仏印の山岳林地帯は、雨も多いので、森林も広大なもの」「耳の中にまで、雨音は溢れていっぱい詰まりそうだ。こうした夜が、如何にもランビアン高原の或日に戻されたような気もしてくる」という『浮雲』の原文の引用によれば、実は仏印は雨の多く降るところのはずである。その理由は、前述通り『浮雲』における〈雨〉は「厳しい現実」「ゆき子と富岡の関係の悪化」「死と生のしきり」と結びついて機能する、つまり好ましくない場面でよく使われるため、主人公にとって「お伽話の世界」の仏印とは合わないのではないかと考えられる。

注

- 『新編日本女性文学全集 第六巻』の野田敦子の解説による。(長谷川啓ほか編、六花出版、2018、p.509)
- 今村潤子「雨の表現にみる感情移入について——『浮雲』を中心に——」、『近代女流文学 岡本かの子・林芙美子・平林たい子・佐多稲子〈日本文学研究資料叢書〉』、有精堂、1983、p.127
- 例えば、今村氏は雨で欠航している屋久島行きの船を待っている場面の会話を引用し、「ゆき子の気持ちが孤独の域にはまり込んでいく姿をみることができる」と解釈するものの、「孤独な女心の表現」ではなく、「男女間の心理の表現」に分類した。このようにテキストは多くの場合で二つ以上の分類に入れられるため、再検討する必要がある。
- 牧野陽子「“熱帯”の幻影——林芙美子『浮雲』について」、『成城大学経済研究』第158巻、成城大学、2002、p.448
- 牧野陽子、前掲論文、p.448
- 今村潤子、前掲論文、p.124
- 川本三郎『林芙美子の昭和』、新書館、2003、pp.326-327
- 仏印での思い出を語る際、雨に三回しか触れていない。一回目は伊香保の宿で「眼の前の山も空も

乳色に煙っている。仏印の山々の、雨に煙っている景色に似ている」という描写である。二回目は富岡が仏印の林業局長に「仏印の山岳林地帯は、雨も多いので、森林も広大なもの」だと教えられた部分である。三回目は、病んだゆき子を富岡が看病する時、「耳の中にまで、雨音は溢れていっぱい詰まりそうだ。こうした夜が、如何にもランピアン高原の或日に戻されたような気もしてくる。この二人は奇妙なつながりであった」という描写である。

参考文献（年代順）

- * 『浮雲』の原文引用は全て『浮雲』（林芙美子、新潮社、昭和28年発行、昭和63年第64刷）によるものである。
- 今村潤子（1983）「雨の表現にみる感情移入について——『浮雲』を中心に——」、日本文学研究資料刊行会編『近代女流文学 岡本かの子・林芙美子・平林たい子・佐多稲子（日本文学研究資料叢書）』、有精堂
- 牧野陽子（2002）「“熱帯”の幻影——林芙美子『浮雲』について」、『成城大学経済研究』第158巻、成城大学
- 川本三郎（2003）『林芙美子の昭和』、新書館
- 長谷川啓ほか編（2018）『新編日本女性文学全集 第六巻』、六花出版